フランス語母語話者の日本語作文における「意図不明表現」の分析
－母語訳との対照から見る「分かりにくさ」の理由－

宇佐美 洋

1. はじめに

筆者がかつてフランス語を母語とする学習者に日本語の作文を教えていたとき，以下のような文に出会って大いに戸惑ったことがあった。

[1]　　確信は人間的なものではないが･･･

「人間的」という語は，日本語としてあまり熟したものともいえないが，一般には「人間としての情合（ジョウアイ）があるようす」(『三省堂国語辞典 第二版』) というような，どちらかというと人間の性格・人格を表現するために使われる語であろう。「確信」という抽象名詞に「人間としての情合がない」というのは，いったいどういうことなのであろう。

これはまさに，「学習者の産出した日本語を見るだけでは，その執筆意図が分からない例」のひとつといえよう。

この文を書いた学習者には次の授業の際，この文の「執筆意図」について詳しく聞くことができた。話を聞くと，どうやらこの学習者は，「人間にとって，確信する，ということはなかなかできないものだ」ということが書きたかったらしいことが分かった。

そこで筆者は，上記の文を

[2]　　「確信する」ということは，人間にはなかなか難しいが･･･

と修正するとともに，[1]のような表現は，この学習者の母語であるフランス語の発想法に強く影響を受けて生まれてきたものではないかという疑いを持った。

「人間的な」という日本語をフランス語に再翻訳すると，humain となるだろう。この語の用法を調べてみると，複数の仏和辞書には C’est humain./C’est une réaction humaine. という例文が挙げられ，そこには，

[3]　　それは人間にはよくあることだ(大修館書店『新スタンダード仏和辞典』)
[4]　　それは人間なら無理もない（態度だ）（三省堂『クラウン仏和辞典』)

という訳文が添えられている。

つまりこの文脈において，フランス語のhumainという形容詞は，「『人間』という存在と結びついた（あるいは結びつきがちな）属性や特徴」を広くカバーする意味領域を持ち

合わせているということができる[1]。一方日本語の「人間的」という語は，辞書の語義説明に「情合」という語が含まれているところからも分かるように，人間の「心情」と結びついた，はるかに限定的かつ具体的なイメージを分かちがたく身にまとってしまっている。

そして読み手は，日本語の「人間性」という語によって，「情合がある」「人間味がある」という具体的な意味をいったん頭に刻み付けてしまうと，その意味では文脈には適合しないということは分かっても，刻み込まれた意味の具体性を離れ，「人間存在と結びついた属性」というもう一段階抽象的な意味へと抜け出て再解釈することはなかなか困難であるように思える。

この学習者に教えていた当時，筆者はすでにフランス語を多少知ってはいたが，それでも学習者本人に話を聞くまでは，「人間的」を「人間にはよくあること」と解釈しなおすことはできなかった。フランス語を知らない教師であれば，それはなおさらであろう。こうした「語の意味の抽象性の違い」によって生じる逸脱表現というのは，コミュニケーション上かなり厄介なものということができそうである。

学習者によって書かれた日本語の文章には，さまざまな文法的・語用論的「逸脱表現」が含まれている。こうした逸脱の中には，容易に訂正可能なものもあるが，ある種の逸脱については，例えば上述の例のように，日本語教師にさえ学習者の真意を測りかねることがある。このような逸脱は，「情報伝達」という言語の基本的機能を阻害する，という点で，特に重篤度の高いものということができよう。教師としては，こうした「重篤度の著しく高い逸脱」の背後にどのような要因が存在するのか，少なくともこの種の逸脱が生じないようにするためには，教育上どのような工夫が必要になるのか，ということについて考察しておく必要があるだろう。

本論では，フランス語母語話者による日本語作文を対象として取り上げ，日本語教師にさえ作文の真意が測りにくい場合はどういうときであるか，そしてその「真意の測りにくさ」の背後に，母語干渉をはじめとする「言語的要因」がどの程度存在しているのかを明らかにする。

2. 使用データ

使用データとしては，『日本語学習者による日本語作文と，その母語訳との対訳データベース・オンライン版』（国立国語研究所）に収録されている，フランス語母語話者のデータ 52 編を使用した。このデータベースのオンライン版には，

A 日本語学習者によって書かれた日本語の文章

[1] *Grand Larousse de la langue francaise en sept volumes* におけるhumainの語義説明は以下のとおり：Qui appartient à h'homme, qui est propre à h'homme en tant qu'être animé, doué de raison (par opposition aux autres espèces animales. [人間に属する～，理性のある生物としての人間に固有の～（他種の動物と対比させて）]

B 文章執筆者本人による，A の母語への翻訳

が収録・公開されており，これを主たる分析対象とした。

以下，それぞれのデータについて詳細に説明する。

2.1. フランス語母語話者による日本語作文

国立国語研究所が指定した数種類の作文テーマの中から，学習者に任意のものをひとつ選んでもらい，そのテーマに基づき 300 字から 800 字程度の日本語作文を書いてもらった。今回の分析では，「日本語学習において，ワープロソフトを活用することについてどう思うか」というテーマ[2]について書かれた作文 52 編（タイトルも 1 文と数え，746 文）を使用した。

執筆者は主としてパリの大学で日本語を学ぶ学生で，日本語学習歴は 1 年から 3 年程度。初級段階を終わり，辞書を使えばある程度まとまった分量の文章を書けるレベルには達しているが，文章中にかなりの頻度で逸脱表現・不自然表現が見られ，文章による伝達能力は決して高いとはいえない。

執筆の際には辞書等を使用してもよいものとした。辞書使用の有無，執筆にかかった時間の情報もデータベースには収録されている。

2.2. 執筆者本人によるフランス語訳

日本語作文を書き終わった後で，執筆者本人にそれをフランス語に訳してもらった。意訳や大意要約ではなく，日本語で書いたことをできるだけそのままフランス語でも書くように指示したため，フランス語の文章としてはやや不自然な点もある。若干の例外を除いて多くの場合，日本語の文とフランス語の文はほぼ 1 対 1 で対応している。

執筆順序としてはあくまで日本語→フランス語の順であるが，日本語表現の中に，フランス語表現の影響によるものではないかと思われる箇所は少なくない。これは日本語作文の執筆時にも，フランス語での表現を念頭に置きつつそれを日本語に置き換えていたことを強く思わせる。

3. 分析対象箇所の確定

前述のとおり今回の調査の目的は，

・フランス語母語話者の日本語作文の中に見られる各種逸脱表現の中で，「日本語教師にもその意図を測りかねるような表現」（以下，「意図不明表現」）としてはどのようなものがあるか。

[2] 作文課題はAppendix参照。

・コミュニケーション上深刻な不全をもたらすそのような表現の背後に，どのような要因が存在するのか。
・それらの要因の中に，フランス語の干渉も含む「言語的要因」によるものはどの程度存在するのか。また「言語的要因」の中で，教育上特に重要と考えられるものはなにか。

を明らかにすることである。

まず，分析対象を以下のような手順で確定することとした。

1) 3 名の評定者による評定

筆者を含む 3 名の評定者[3]が，フランス語母語話者による日本語作文 52 編全編に目を通し，

・前後の文脈を参照しても，表現意図がほとんど推測できない箇所
・前後の文脈を参照することで表現意図の推測はおおむね可能であるが，その推測に確証が持てないか，あるいは複数の推測可能性がある箇所

を抽出した。範囲指定は評定者の自由に任せた[4]。また抽出時にフランス語訳は参照しなかった。

ここではあくまで「文脈の中で文意が理解できるか」というところに焦点を当てて抽出をおこない，「規範からずれている」「初級レベルの文法項目なのにうまく使えていない」「違和感がある」，というような点は考慮しなかった。つまり，規範からの逸脱があったり，文体上きわめて強い違和感があったりしても，「前後の文脈を参照すれば執筆意図が一意に，かつ容易に解釈され，他の解釈はほぼありえないと考えられる箇所」は抽出対象とはしなかった。

2) 評定結果のつき合わせによる「意図不明焦点」の特定

3 名の評定結果をつき合わせ，3 名のうち 2 名以上が一致して「明瞭に文意を推測することが不可能」と判定した箇所を，今回の調査の分析対象と認定した（つまり，1 名のみが「意図不明」または「意図推測困難」と判定した箇所は分析対象とはしない）。

前述のとおり，「意図不明箇所」の範囲指定は評定者の自由に任せてあるので，ひとつの「意図不明表現」に対する範囲指定は評定者によってずれており，また「意味の分かりにくさ」が生じた理由も，必ずしも指定された範囲内に存在するとは限らない。

[3] 筆者を含む 2 名は日本語教育経験者，もう 1 名は，日本語教育経験を持たない日本語研究者である。
[4] 例えば「ワープロソフトを使ったらだいじょうぶで、使わなかったらじしょをえらびます」(fr002)という文について，意図不明の範囲を一定の基準によって決めてしまうことは困難である。したがって評定者自身の判断により，文全体を選択しても，「じしょをえらびます」の部分だけを選択しても，あるいは「えらびます」だけを選択してもかまわないものとした。

そこで,「2 人以上の評定者の指定範囲が重なった部分」を「意図不明焦点」として認定し,「意味の不明さ」が生じた理由は，焦点の前後を適宜参照しつつ分析することとした。

この作業により，52 編の作文から，93 箇所(89 文)の「意図不明焦点」を抽出した。

4. 「意味の不明さ」が生じた理由の分類

4.1. 教育改善に結びつく「意図不明表現」と，そうでない「意図不明表現」

上記で取り出された「意図不明焦点」を含む日本語の文と，それに対応するフランス語の翻訳文を比較対照し,「意味の不明さ」が生じた理由の分析をおこなうこととした。

ところで，ひとくちに「意図不明表現」といっても，中には「教育の改善」に向けての有効な提言に結びつきやすいものとそうでないものがある。例えば

ア）母語訳を参照しても理解困難な意図不明表現

については，学習者自身が考えを十分にまとめきれていなかったり，非常に個人的な思考フレームに基づいて文章が構成されていたり,という理由によって生じたことが想定され,言語学的なアプローチのみによっては手当てすることが困難である。

また，母語訳を参照することによって執筆意図は分かったとしても,

イ）(おそらくは日本語能力の絶対的な不足により）日本語表現の中に必要な説明を十分に盛り込むことができていないために生じたと考えられる意図不明表現

についてもア）同様，言語学的要因によっては説明のつきにくい箇所であり，また

ウ）学習者自身の単純な勘違い等に基づいており，ひとこと指摘すれば再現性は低いと考えられる意図不明表現

は，あくまで個別的な現象であって他への応用が利かず，この種の表現を多数収集しても言語研究上資するところは薄い(吉川 1997:45)と考えられる。またこの種の「意図不明表現」は学習者の母語を問わず，また学習レベルを問わず生じうるものと考えられる（母語話者にもありうるかもしれない)。

そこで今回の調査では,

エ）主として言語上の要因によって生じたと考えられる「意図不明表現」であって，ある程度再現性があると考えられるもの

を主たる分析対象として設定するが，ア）～ウ）も無視してしまうのでなく，それぞれの

タイプが「意図不明表現」全体の中でどの程度の頻度で現れているのかを把握しておくこととした。

4.2. 「意図不明表現」の分類

そこで今回の調査では，母語訳を参照することによって，「意図不明表現」を，以下のような手順で分類することとした。

1) 母語訳[5]を参照することで，執筆意図が分かるか
2) 執筆意図が分かった場合，「分かりにくさ」が生じた理由を言語的な要因によって説明ができ，かつ「再現性」があって，教育上特別な手当てが必要と考えられるか

この判定作業により，「意図不明表現」を以下のように「グループ A」「グループ B」「グループ C」の 3 つに分類した。

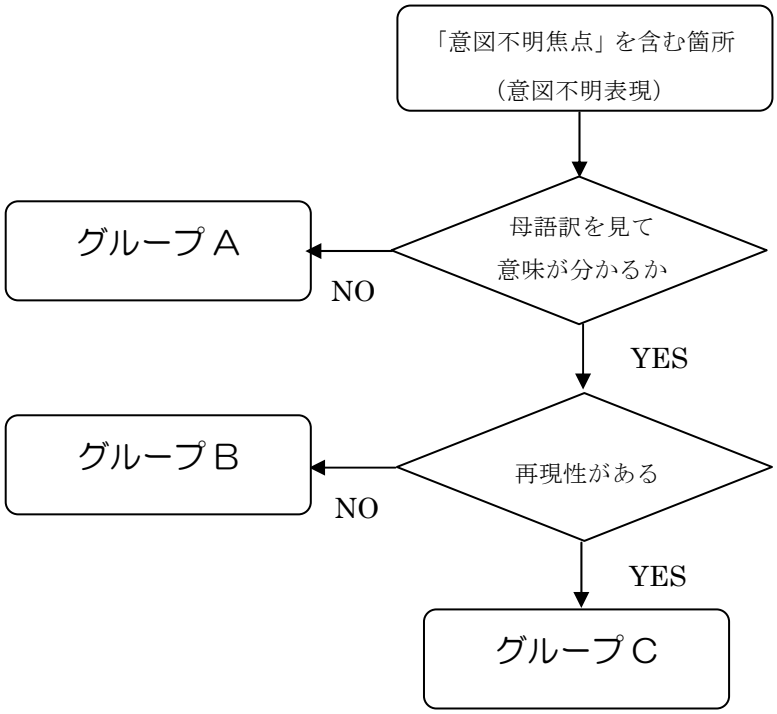

図 1　「意図不明表現」分類のためのフローチャート

「グループ A」は，「日本語作文を読んでも意味が分からないが，フランス語も日本語のほぼ直訳となっている，というような理由により，やはり意図不明」というものである。

例としては以下のようなものがある（なお以下の日本語例文において，「意図不明焦点」

[5] 「対応する母語訳が存在しない」場合，「日本語作文と母語訳とが対応していない場合」は，「母語訳を参照しても意図が分からない」ものとして扱った。

として抽出された箇所には下線を引いた。

[5]　新しい各進歩は知識機構に置く石のようだと思う。(fr087)

[6]　Chaque nouveau progrès est une pierre portée à l'édifice de la connaissance.

ここでは「進歩」が「石」である，という比喩が用いられているのであるが，前後の文脈を併せ読んでも，なぜ「進歩」が「石」に喩えられるのか，その理由は分からない。このような表現が生まれてくる理由は一概には決められないが,「そもそも執筆者自身が自分の考えを十分にまとめきれていない」「きわめて個人的な思考フレームに基づいて文章を書いている」ということなどが主要な理由として想定できる。これは 4.1 節で挙げたア）にあたるものである。

「グループ B」は,「フランス語訳を読むと執筆意図はよく分かるのだが，日本語の分かりにくさが，学習者自身の説明不足や，単なる勘違い等に基づいており，再現性が低いと考えられるもの」である。

例を挙げよう。

[7]　短くても手で書いた文章は個性的で、人生の大切は時には「とっておきたい」ものです。(fr052)

[8]　Même courtes, les phrases écrites à la main reflètent une certaine personalité (individualité) et bien souvent elles constituent des documents que l'on souhaite conserver, lorsqu'elles se rattachent à un événement important de la vie. [日本語への再翻訳：短くても，手書きの文章はひとの人格（個性）を反映している。人生の大切なできごとについて書かれたものであれば，それをとっておきたいと思うこともしばしばである]

母語訳によれば，執筆者はかなり複雑なことを書きたかったことが分かるが，実際にはそこまで書ききれず，日本語では非常にはしょった表現になってしまったものと推測できる。これは 4.1 節のイ）にあたるものである。

また，以下のような例もある。

[9]　第一の理由は、コンピュータやデスクトップなどは紙程残らない。(fr017)

[10]　La première est que les ordinateurs et les disquettes ne durent pas aussi longtemps que le papier.

コンピュータやデスクトップが「紙程残らない」という箇所が「意図不明焦点」として抽出されたが，母語訳を見ると,「デスクトップ」とは disquettes（フロッピーディスク）

のつもりであったことが分かる。分かりにくさの理由は「紙ほど残らない」ではなく「デスクトップ」のほうにあったことが分かるのだが，これは音の類似に引きずられた単純な勘違いに過ぎず，教育上特に重視すべきものとはいえない。これは 4.1 節のウ）にあたるものである。

この例のように，「本来そこで使用すべき語を，意味的にほとんど重ならない別の語と取り違えている」ことによって生じた意図不明表現[6]は，すべてこの「グループB」に入れた。

残る「グループ C」が，今回の調査での中心的な分析対象となるものである。これは 4.1 節で挙げた

エ）主として言語上の要因によって生じたと考えられる「意図不明表現」であって，ある程度再現性があると考えられるもの

ということになる。

ただし，エ）に含まれる意図不明表現が，必ずしも「母語干渉によるもの」かどうかは分からない，ということをここで確認しておこう。エ）には，単に日本語の文法項目・語彙の意味・社会言語学的な表現習慣等を正確に理解していないことによる逸脱表現が広く含まれる。もちろんその中には母語の影響が色濃く見て取れるものもあるが，個々の意図不明表現について，そこに母語の影響があるかどうかをひとつひとつ詮索することは，今回の調査ではおこなわなかった。

4.3. 「意図不明表現」の内訳

4.3.1. グループ A,B,C の内訳

意図不明箇所 93 箇所の中で，「グループ A」「グループ B」「グループ C」の内訳は以下のようであった。今回の調査データの中では，グループ C が 93 箇所のうちほぼ半分にあたる 42 箇所を占めていた。

[6] 他には，「まだできない（人）」（débutant）とすべきところを「またできない」，「でも」(cependent) とすべきところを「では」としているような例である。もちろん執筆者がこのような形で「間違えて覚えてしまっている」場合，再現性があることになるのだが，間違いを指摘さえすれば簡単に修正できるものと考え，グループBに入れた。

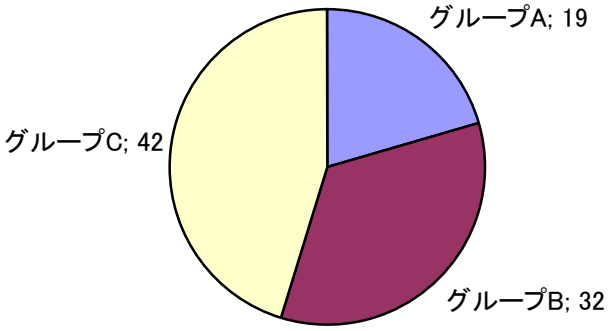

図 2 「意図不明表現」グループ A, B, C の内訳

4.3.2. グループ C の内訳

次に，上記の手順によって得られた「グループ C」の表現について，対応するフランス語表現とを対照することにより，その「分かりにくさ」がどのような要因によって生じたかを考察し，さらに下位分類をおこなうこととした。

吉川(1997:9)では，誤用分類の要点として，

① 発音の誤り
② 表記の誤り
③ 語彙の誤り
④ 文法の誤り
⑤ 表現の誤り

の 5 カテゴリーを挙げているが，今回使用している作文データでは，①と②を区別することはできない(例えば「日本魂」とすべきところを「日本だまし」(fr082)と書いている場合，「い」を書き漏らしたのか，長音と短音の区別がついていないのかは分からない)。またそもそも，今回の分類において表記の誤りは「再現性のない誤り」としてすべて「グループ B」に帰属されているので「グループ C」の下位分類としては不要である。

また「語彙の誤り」の中でも，勘違いなどによって意味的にほとんど共通点のない語と取り違えた，というような例はすべて「グループ B」に入れられている。「グループ C」で問題となる「語彙の誤り」とは，「おそらくは意識的に語彙選択をおこなったのだが，選択した語の意味が当該文脈と十分適合するものではなかったために，執筆者の意図が読み手に伝わらなかった」というものだ，ということになる。

そこで「グループ C」の下位分類としては，

① 語彙に関するもの
② 文法に関するもの
③ 表現に関するもの

の 3 つを採用することとした[7]。

ここで，ひとつの「意図不明表現」が，上記 3 カテゴリーのいずれかに必ず帰属されるわけでない，ということを確認しておきたい。

例えば以下のような例を見てみよう。

[11] 日本において、手書きの文字の放棄は日本が<u>極度に推進される</u>書道の死を意味するだろうと思う。(fr087)

[12] La disparition de l'écriture manuscrite, au Japon, signifierait la mort de la calligraphie que le Japon a porté à son plus haut niveau. [日本語への再翻訳：**日本において，手で書かれたものがなくなる，ということは，日本が非常な高水準にまで発達させた**(直訳は「高水準にまで持っていった」)**書道の死を意味することになろう**]

ここでは avoir porté à son plus haut niveau(非常な高水準にまで持っていった)という内容を，「推進される」と表現してしまったわけだが，ここには，文脈に合わない語(「推進する」)を選択してしまったという問題と，その語を文法的に不適切な形で使ってしまった（使役形にするつもりで誤って受身形にし，さらに完了の「た」をつけ忘れた？）という問題の両方が絡んでいると考えられる。

こうした場合には，ひとつの「意図不明表現」について，ふたつ[8]の「意図不明要因」があると考え，上記下位分類の①,②として二重にカウントすることとした。

その上で，それぞれのカテゴリーに属する「意図不明表現」の内訳を示すと以下のようになる。特に数の多かった「① 語彙に関するもの」については，品詞の内訳も示した。

---

[7] 実際の「意図不明表現」がこの 3 分類のいずれにあたるかを判別する際には，母語訳を参照した上で，「日本語では本来どう書くべきであったか」を推測し，「書くべきであったが書けなかったこと」が，3 つの分類カテゴリーのいずれに当てはまるのかを考えることとした。例えば，表面的には日本語の時制表現がうまくできていないのであるが，日本語としては文法的手段ではなく，副詞等語彙的手段によって表現するのが最も適切，と考えられる場合は，「文法に関するもの」ではなく「語彙に関するもの」と分類した。

[8] 「文法的誤り」として，「使役形」「アスペクト」という 2 種類を数えることも可能であるが，しかし誤用が生じた理由の切り分けはしばしば困難である。同一箇所での誤りについてふたつ以上の項目が関係していると思われる場合も，それらがすべて「文法」に関するものと考えられる限り，1 種類の誤りとしてカウントした。

①語彙に関するもの	35	
	抽象名詞	15
	一般名詞	2
	動詞	8
	形容詞	5
	副詞	3
	前置詞	1
	副詞	1
②文法に関するもの	6	
③表現に関するもの	6	

表１　グループＣの「意図不明表現」の内訳

5.「意図不明表現」が生じた要因の分析

以下，それぞれのカテゴリーから「意図不明表現」の実例をいくつか挙げ，その表現が生じた要因について具体的に考察してみよう。

5.1. 語彙に関するもの

語彙選択に関わる意図不明表現としては，名詞，特に「フランス語の抽象名詞を日本語に置き換える際に何らかの不都合が起こっているものが特に多かった。「語彙に関するもの」33 例のうち，抽象名詞が関わるものが 15 例と約半数を占める。これは，すべての「意図不明表現」93 箇所に対しても約 16 パーセントというかなりの高率を占めることになる。

実際の例を挙げよう。

[13] ･･･コンピュータに対する本の<u>残存物</u>についての議論と同じ議論だと思う。(fr087)

この文は，「日本では，日本語を書く際，ワープロソフトを使うことが多くなった，という問題について論じたい」という問題提起の直後に来るものであるが，そうした文脈を併せ読んだとしても，やはりこの文で何を言いたいのかは不明であり，特に「本の残存物」の部分が分からない。ここは，3 名の評定者が 3 名とも「まったく分からない」という判定を下した部分であった。

この箇所に対応するフランス語訳は，以下のようになっていた。

[14] Je pense que c’est le même débat que celui de la survivance du livre face à l’ordinateur･･･.

翻訳を参照すると，「残存物」は la survivance という語と対応している。つまり「コンピュータに対する本の残存物の議論」とは，「コンピュータというものに直面して，(印刷物としての)本が生き残っていけるかどうかの議論」，のことであったことが分かる。

survivre（生き残る）を抽象名詞化した la survivance には，「生き残ること」「生き残ったもの」両様の意味があり，日本語としては両者をはっきり表現し分けなければならない。そしてここで la survivance は，前者の意味で使われているのであるが，執筆者は後者に対応する日本語表現である「残存物」のほうを使用してしまったのであろう。辞書を引いて，最初に見つけた表現をそのまま使ってしまった，というような可能性が想像できる。

また，以下のような表現も見受けられた。

[15] まず、<u>読書の問題</u>[9]がありません。(fr030)

この文は，「ワープロソフトの使用は便利である」ということの第一の理由として提示されているものであるが，「読書」とは何のことなのか，やはりこれだけでは分からない。フランス語訳では，

[16] D'abord il n'y a pas de problème de lecture.

となっており，「読書」は lecture と対応している。

lecture は，「読む」という動詞的概念を名詞化するときには広く使用できる，意味範囲の広い語であり，フランス語訳を参照してもなお執筆者の真意は分かりにくいところがあるが，さらにその後の部分を読み進めると，「日本語には同音の漢字が多く，例えば『紹介』の『紹』と『招待』の『招』は，音が同じなので混同してしまうが，ワープロソフトを使うとこういう間違いは避けられる」ということが書かれている。フランス語訳に加え，さらに文脈の助けも借りて解釈をおこなうならば，[15]は，

[15'] 漢字の<u>読み方にともなう問題</u>が起こりません。

のようにすべきであったことが分かる。

lecture は，日本語としては「読むこと，読み方，読めること，読書，朗読，読み物･･･」など，文脈によってさまざまな語を使い分ける必要がある。こうした使い分けを十分に習得することは，フランス語母語話者にとって非常に困難であろうことがここからうかがえる。

---

9 「問題」は，執筆者の表記どおりである。

5.2. 文法に関するもの

文法的知識の不足によって生じたと考えられる「意図不明表現」は 6 例であり，語彙に関するものと比べると頻度としてはかなり少なくなる。

例が少ないため，これらの中から顕著な特徴を見出すことは難しいが，うち 2 例は，時制の表現がうまくいっていない，という点で共通している。

まず 1 例を挙げよう。

[17] しかし、それを使用する日は、私の日本語のレベールは上分だと言いますから、もう上達したくないです。(fr038)

[18] Cependant, le jour où je l'utiliserais, c'est parce que je dirais que mon niveau de japonais sera suffisant, alors je ne voudrais plus faire de progrès.

日本語中の「それ」とは，「ワープロソフト」のこと。「ワープロソフトを使う日には，私の日本語のレベルは十分であろうから，それ以上うまくなりたいとは思わないだろう」のように書きたかったものと思われる。フランス語において動詞はすべて未来形になっており(utiliserais, dirais, sera, voudrais)，全体として未来の話をしているのであるが，日本語ではそのことが十分に表現されていないため，「もう上達したくない」というのがあたかも現在の話であるかのように読めてしまい，このことが分かりにくさにつながっているものと思われる。

同様の例として，

[19] それがわかるためには悪い面と有利を勉強している。(fr065)

[20] Pour comprendre cela, nous allons étudier les avantages et inconvénients.

というものがあった。これは「コンピュータに対して賛否両論がある」という記述に続く文であり，フランス語ではallerという，近接未来を示す準助動詞が使用されている。「そのこと(賛否両論)を理解するために，(コンピュータの)利点と不都合な点について検討してみよう」[10]ということなのであろうが，日本語では現在進行中，あるいは習慣的な動作であるように表現されてしまっている。

このように時制表現ができていないと，文章内で語られる事物に対し，書き手がいまどういう立場に立って向き合っているのかが分からなくなるため，全体としての意味理解にも支障が出やすくなるものと思われる。

その他，日本語の使役表現がうまく表現できていないことが理由と思われる例も複数あ

[10] ここでも，「勉強する」という文脈に合わない動詞が使用されているということと，時制の使い方が誤っている，というふたつの「意図不明要因」が関わっているものと解釈した。

った。ひとつは[11]で挙げた例（「極度に推進される書道の死」）であり，もうひとつは以下に挙げるものである。

[21]　実際、日本の勉強をすることは時間が必要だから、記憶力はよく働く。(fr065)

[22] Effectivement, l'étude du japonais nécessitant du temps, on fait souvent fonctionner sa mémoire.

「記憶力は働く」ではなく,「記憶力を働かせなければならない」とでもすべきところであろう。

今回のデータの中からは，文法に関する意図不明表現の中では,「時制」「使役」に関わるものがそれぞれ 2 例ずつ発見された[11]。しかし，文法に関する意味不明表現が全体で 6 例しかないこともあり, このふたつの文法項目が特に重要なものであるとは明言できない。文法項目の中で，特に深刻なコミュニケーション不全とつながりやすいものはどのようなものかを明らかにするためにはさらに多くのデータにあたらなければならないが，そもそも，文法項目と関係する意味不明表現は，語彙選択に関わる意味不明表現に比べ頻度数がかなり少なかった，ということは，留意しておくべきことであろう。

5.3. 表現に関するもの

表現に関する意図不明表現としては，フランス語の「非人称構文」に関係している例を挙げる。

[23] ところが大切な宿題について，先生に敬意を表するのが問題であるとワープロソフトを使う方がいいです。(fr030)

[24] Pourtant, en ce qui concerne les devoirs importants et qu'il s'agit de les rendre au professeur, il vaut mieux utiliser un traitement de texte.

[23]に「問題である」という表現が現れたのは，フランス語の il s'agit de を直訳したためだということは明瞭に分かる。il s'agit de は，あえて日本語に訳するならば「～が問題である，～に関わることだ，～が主題だ」のようになるが，実際には非常に軽い意味で使われており,「問題である」と訳してしまうと大げさになりすぎる場合が多い。ここは,「先生に敬意を表するべきときには」くらいの表現でよかったのであるが，わざわざ律儀に「問題である」と表現してしまったので，かえって意味が分かりにくくなってしまったものと見ることができる。

[11] 他の不明表現の間には特に共通点は見られなかった。

[25]　それで何があったのですか。(fr035)
[26]　Alors, que s'est-il passé?

[25]は,「ワープロソフトを使う人は，漢字を書くことに困難を感じるようになる」という記述の後に来る文で，その後には「漢字を書く習慣がなくなり，難しい漢字も簡単な漢字も忘れてしまうようになる」という意味のことが書かれている。この文脈から考えると[25]は,

[25']　それでどうなったのであろうか。

のように書くべきであったことになろう。

[26]も非人称構文であるが，[25]の理解困難性は，非人称構文に基づくものというよりは，文章中にいきなり「～ですか」という問いかけが現れてきたというその唐突さに基づくものと考えることができる。

伊集院･髙橋(2004)では，やはり「作文対訳 DB」の中国語母語話者データを用い,「中国語母語話者の日本語作文には，読み手に直接語りかけるような表現が多用される」という指摘をしているが，こうした表現は，中国語母語話者ほど頻繁ではないにせよ，他の言語を母語とする学習者の作文にも現れうることが分かる。ただ，伊集院･髙橋(2004)が挙げる「語りかけ表現」の多くは，不自然ではあるとはいえ，書き手の意図がまったく分からない，というようなものではないのであるが，[25]は 3 名の判定者のうち 2 名までが「まったく分からない」と判定し，もう 1 名も「なんとなく分かるが確証が持てない」と判定した部分であった。同じ「語りかけ表現」であっても,「なんとなく不自然」というものから,「意味がまったく分からない」というものまでさまざまなものがありうる。「語りかけ表現」がどのような現れ方をしたときに「意図不明表現」となりうるのか，というようなことも今後の興味深いテーマのひとつとなろう。

6. 結果

今回の調査で明らかになったことは以下のとおりである。

1) フランス語母語話者の書いた日本語作文の中の「意図不明箇所」(日本語母語話者が見ても執筆者の意図を推測することが不可能または困難な箇所)全体のうち，母語訳を参照することによって執筆者の意図を推測することが可能な箇所(「グループ B,C」の「意図不明表現」)は，93 箇所のうち 74 箇所(79.6 パーセント)であった。これは,「作文対訳 DB」のうちフランス語母語話者のデータのみを検討した結果にすぎないが，このことは母語訳つきの作文対訳データベースが，研究上有効な資料となりうることを示しているといってよいだろう。

2)「意図不明箇所」のうち，言語的な要因によって発生理由の説明がつき，かつ再現性があるものと考えられるもの（「グループ C」の意図不明表現）は，93 箇所のうち 42 箇所(45.2 パーセント)であった。

3) 「グループ C」の意図不明表現を，①語彙選択に関するもの，②文法に関するもの，③表現に関するものに分類すると，①語彙選択に関するもの，と解釈できるものが 35 箇所（74.5 パーセント）と大半を占め，②文法に関するもの，③表現に関するもの，と解釈できるものはそれぞれ 6 箇所(12.8 パーセント)ずつであった。また，語彙選択に関する意図不明表現の中では，名詞，特に抽象名詞に関するものが 15 箇所(42.9 パーセント)を占めた。

つまりフランス語母語話者の「意図不明表現」をもたらす最も重要な要因は「語彙選択」に関する問題であり，中でも抽象名詞に関わるものが重要な位置を占める，ということが数量的に示されたものといえる。

7. 考察

一般にフランス語に顕著な特徴として，「語義の抽象性」（大橋 1974），「多義的な単語の使用」（蓮實 1977）ということがしばしば指摘される。つまり，ひとつの語が持つ意味が抽象的であり，その結果としてひとつの語がさまざまな範囲の事象を表現するのに使われる，ということである。そしてその抽象性・多義性は，17 世紀の古典主義時代に，「外延と内包という論理学的な水準に従い、共通項のあるものは同一の概念で示すという姿勢によって遂行された」（蓮實 1977:189）文化政策によってもたらされたものとされる。

このため，フランス語の抽象名詞 1 語に対しては複数の日本語表現が対応することになり（例えば 5.1 節で挙げたように，フランス語の lecture 1 語に対し，日本語では「読むこと，読み方，読めること，読書，朗読，読み物･･･」などが対応する），したがって日本語を書くときには，当該文脈に最も適合する対応表現を吟味して使用しなければならないのであるが，実際のところ学習者は必要な吟味をせず（おそらくはその手段がないため），辞書を引いて最初に目についた訳語をそのまま使用しているということが想像される。

日本語の対応表現はどれをとってみても，フランス語の抽象名詞より具体的かつ限定的な意味範囲を持っている。したがって学習者が選択した語は，多くの場合本人が意図したよりずっと限定的かつ具体的な意味を持ってしまい，このため読み手としては，その語が身にまとっている不必要に限定的・具体的な意味に惑わされ，学習者の意図を取り損ねてしまうことになるものと考えられる。

さらにヴァルトブルク(1976)は，フランス語には「事件や行為を動詞よりもむしろ名詞で表現する」傾向があることを指摘している。この傾向は 19 世紀の間に強まったとされ，

例えばルグランの『フランス文体論』(E. Legrand, Stylistique Française)では,

[27]　Ils cédèrent parce qu'on leur promit formellement qu'ils ne seraient pas punis.
「彼らは自分たちが罰せられないと正式に約束してもらったので，譲歩した」

のように，ふたつの従属節によって表現することを避け,

[28]　Ils cédèrent à une promesse formelle d'impunité.
「彼らは処罰しないという正式の約束によって譲歩した」

と表現するように勧められているという(ヴァルトブルク 1976:274)。

フランス語母語話者の日本語作文を見ると，まさに上記のような発想によって作られた日本語表現に頻繁に出会うことができる。既出の例でいえば,

[11]　日本において、手書きの文字の放棄は日本が極度に推進される書道の死を意味するだろうと思う。(fr087)
[13]　･･･コンピュータに対する本の残存物についての議論と同じ議論だと思う。(fr087)

などがそうであろう。筆者自身は 4.3.2 節において，[11]のフランス語訳([12])からの再翻訳として「手で書かれたものがなくなる，ということは･･･」というものを示したが，これをさらに書き換え,

[11']　手書きの文字がなくなると，･･･書道は死んでしまうことになると思う

のように，名詞（「文字の放棄」「なくなる，ということ」「死」）を使うのでなく，動詞を用いてふたつの節として表現するならば，日本語としての自然さはさらに増すことになるであろう。

事件や行為を動詞ではなく名詞（多くは抽象名詞）を用いて表現する，というフランス語の表現指向それ自体は，日本語としてやや不自然な表現につながることにはなっても，常に「意図不明表現」をもたらすわけではない。[11]は「意図不明表現」として抽出されたものであるが,「意味不明焦点」は「極度に推進される書道云々」の部分であって,「手書きの文字の放棄は･･･死を意味する」の部分については特に「意図不明」との指摘はなかった。「放棄」という抽象名詞を主語に据えたこうした表現は，確かに日本語としてやや生硬に響くが，しかし誤りでは決してなく,「翻訳調」と考えれば許容しうる範囲の表現ということもできる。

また，事件や行為を，名詞で表現するか動詞で表現するかということは，究極的には「趣

味の問題」である。一般的に，名詞で表現したほうがより簡潔な表現は可能になり，それがフランス語母語話者の趣味に合うのであるが，日本語母語話者にはそのような表現習慣は少ない，ということなのであろう。文章は可能な限り簡潔であるべきだ，と考えるフランス語母語話者が，日本語で文章を書くときにも，名詞を多用する表現を使いたがったとしても，そのことは一概に排除すべきことではない。

しかしながらこうした表現傾向は，日本語において使い方の難しい抽象名詞を過剰に出現させることにつながり，間接的に「意図不明表現」と結びつく危険性は高い。日本語による確実な情報伝達をおこなうためには，あまり使わないほうが無難な表現であるとはいえる。作文指導をおこなう教師としては，どのような態度で指導に臨むべきか，ということが問題になるだろう。

このことについて，筆者は以下のように考える：

学習者にとって日本語の抽象名詞が使いにくいからといって，その使用を避けるように指導したり，フランス語の特定の抽象名詞に対応する日本語の各種表現の間の使い分けを教え込んだりすることは，もちろん場合によっては必要なことであるが，それだけでは意味が薄い。重要なことは，学習者自身が日本語とフランス語を自ら見つめなおし，「それぞれの言語を支える基本的な発想を理解し，それぞれの言語に見られる種々の事柄をそれと関連付けて有機的に理解する」(井上 2002:10)能力を体得する，ということである。井上(2002)の用語に従えば，〈類型設定型〉の言語対照能力を身につけてもらう，ということになる。

動作や行為を表現する際に，フランス語では名詞を多用した表現が好まれるが日本語では素直に動詞によって表現されることが多いこと，フランス語の名詞は語義の抽象性が高いため，フランス語のひとつの抽象名詞に対し日本語では複数の表現が対応し，文脈に応じた使い分けが必要になること，文脈に応じた使い分けがうまくいかないと「意図不明表現」が生じる可能性が高くなること。まずはこういったことを学習者自身に知ってもらうことが必要である。その上で，コミュニケーション不全を生じやすい名詞的表現は日本語では避ける，というストラテジーをとるのか，日本語で抽象名詞を用いて自然な文を書くのは難しいということは承知の上で，あえてそうした表現方法に挑戦するのか。それは学習者自身が選択する，というのが望ましい方向であろう。

学習者自身にそのような能力を体得してもらうため，具体的にはどのような方策がありうるか，ということについては今後の研究に俟たねばならない。しかしその方策を考えていくにあたって，われわれはこの「作文対訳 DB」に含まれている各種データからさまざまな示唆を受け取ることができるだろう。

注記：この論文は，宇佐美洋(2004)「フランス語母語話者の日本語作文における『意図不明表現』－執筆者本人による母語訳からわかること」(『ヨーロッパ日本語教育』9, 169-174，ヨーロッパ日本語教師会）に対し，大幅な加筆修整を加えたものである。

引用文献

井上優(2002)「「言語の対照研究」の役割と意義」,『対照研究と日本語教育』, 3-20, 国立国語研究所

伊集院郁子・髙橋圭子(2004)「文末のモダリティに見られる“Writer/Reader visibility” ー中国人学習者と日本語母語話者の意見文の比較ー」,『日本語教育』123 号, 86-95, 日本語教育学会

大橋保夫(1974)「フランス語は明晰な言語か」, 大橋他(1993)『フランス語とはどういう言語か』に再掲, 59-71, 駿河台出版社

蓮實重彦(1977)「明晰性の神話」,『反=日本語論』, 179-193, 筑摩書房

吉川武時(1997)「誤用分析 I」,『日本語誤用分析』(明治書院企画編集部編), 2-53, 明治書院

ヴァルトブルク(1976)『フランス語の進化と構造』, 田島宏他共訳, 白水社

Appendix

作文課題

次の文を読んで、自分の意見を 400～800 字くらいの日本語で書いてください。日本語で書いたあと、その文章をあなたの母語（mother tongue, または最も楽に文章が書ける言語）に訳してください。

　最近日本では、日本語の文章を書くときにコンピュータのワープロソフト（word processing software）を使うことが多くなりました。ワープロソフトを使えば、自分では書けない漢字を使うこともできますが、一方では、ワープロソフトを使うことで漢字が手で書けなくなってしまうということも起こります。

　ある人は、漢字は書けなくても読めて意味がわかればいいのだから、日本語学習でもワープロソフトをもっと使うべきだといいます。ある人は、漢字が手で書けるということはやはり大事なことなので、日本語学習ではワープロソフトは使うべきではないといいます。あなた自身はどう思いますか。理由を挙げて、あなた自身の考えを書いてください。